

# 今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

苅谷剛彦・本田由紀 編

## 『大卒就職の社会学』

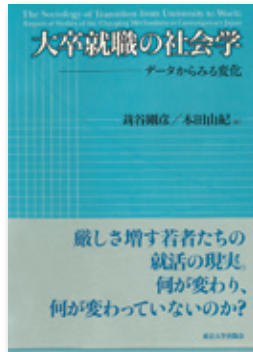
(2010年 東京大学出版会)

大卒就職者数が高卒就職者数を上回ったのは、1998年度のことであった。しかしその昔、新規学卒者の中核は中卒者だった時代があった。ところが中卒就職者は急速に姿を消し、1965年度からは新規就職者は高卒か大学卒が中心となる時代が到来した。しかし1998年度を境に大卒就職者数が高卒就職者数を上回り、それ以降就職といえば、大卒者が中心となった。こうした変化のなかで研究者は、かつては中卒就職者を対象とし、次いで高卒就職者を対象として、その実態の分析を通じて、日本社会の変化とその意味を問い続けてきた。そして今や大卒就職市場を対象に、正規雇用、派遣社員、臨時採用、期間採用、パートタイムといった多様な採用形態に焦点を当てる段階となった。

### 溢れ出す大卒者、身を縮める学生

この本では、1990年以降現在までの20年間に、大卒就職市場がどう変化したのかを、種々のデータを使って記録している。この20年間はグローバリゼーションの本格化の結果、日本から多くの工場が海外に流出し、国内の雇用機会が激減した時期に当たる。そのなかで大学だけは拡大を続け、史上最多の大卒者が就職市場に溢れ出した時期に当たっている。就職協定の廃止、指定校制・推薦制・OB・OGネットワークの消滅、就職活動の早期化と長期化、インターネットを通じてのエントリー・シートの大量送付が始まった時期である。一見、就職市場の自由化が進んだように見えても、本報告によると、ブランド大学からブランド企業へという太いパイプは依然として生き続けているという。非ブランド大学卒業者は新規市場ともいべき非正規雇用へ吸収されるか、そこからさえも溢れ出ている。

だがこうしたストーリーは改めてデータを見せられるまでもなく、さまざまなメディアを通じてすでに報道済みのことではなからうか。果たして今必要なのは、こうした詳



細な記録を作ることなのだろうか。むしろ研究者に求められているのは、採用者側・就職者側もともに絡めとられている、目に見えない無言の「足枷」を可視化して見せ、我々が陥っている「罠」に気づかせることではなからうか。本書が指摘しているように、在学中から就職活動を始めるのは、欧州では4割しかいないのに、日本では9割に達する。大学とは入った瞬間から一目散に、就職という目

標に向かって一気に駆け抜けるパイプとなっている。就活が勉強を邪魔しているなどということは、この際小さなことである。むしろ若者がさまざまな社会体験に挑戦しながら、自分の気づかない能力を発見したり、限界に気づいたりする時期に、日本の若者は島国のなかで身を縮めている。これは将来の人材育成・能力開発に、長期的なマイナス効果を与えないで済むのだろうか。この異常さがどうして毎年繰り返されているのか、その「なぜ」に答えることが研究者の課題ではなからうか。

### 既成の枠組みを打破する手法に期待

本書でもこの現状を打開するための提言がいくつかなされている。しかし就職協定に工夫を加える程度で片づくのだろうか。そもそも大学というハコモノを従来通りのままと前提していて済むのだろうか。学部、学科といった知の縦割り構造を、このままに置いて良いのだろうか。最近では「希望学」とか「リスク学」といった新分野が提案されているが、今や既成の学問枠組みが邪魔になってきた証拠ではなからうか。人間の知恵を引き出すうえでは妨げになっているのではなからうか。しかしその組み替えは、まったくの更地から始められるわけではない。いったい誰がどこから、どう始めるのかの工程表が求められている。人々が期待しているのは、その工程表である。大学だけでなく、問題解決に向けての手法の組み替えが必要な段階が到来した。